



UNHCR東京事務所  
目沢寿美子

# 子どもたちに 明るい未来を! タイのミャンマー難民

## 難民キャンプへの道のり

「ガクン!」「ドスン!」車の揺れに伴い、車内に「ウッ!」と声が漏れる。縦横、斜めに揺られての往復6時間。タイの北西部、メーホンソン県のメーサリアンという町と、メラウ難民キャンプとの間の山道だった。頭がガンガン窓枠に当たり痛い。前夜の雨が災いし、未舗装路はひどい悪路となっていた。すぐ脇に絶壁が迫る道も多く、車が転落した場合の脱出法を、頭の中で何度もシミュレーションする。車に酔う人は、フィールド職員には向かない、そして腕利きのドライバーの確保は絶対条件だと強く思った。

そうしているうちに、眼前の山の斜面に難民キャンプの家々が現れてきた。いや、キャンプと言うより、村人たちが生活する普通の集落に感じられた。このメラウ・キャンプの前に訪れたパントラクター難民キャンプでも、整然とした村、という印象を受けていた。いずれのキャンプもミャンマー国境から3kmほどしか離れていない。車から川の向こうに見えたミャンマー領は地雷原だという。

## 難民キャンプの人々

タイには現在、計9つのキャンプがある。難民の多くは1980年代から90年代にかけて、ミャンマーの政治的問題や民族問題によって祖国から逃げてきた。パントラクター・キャンプでは主にカレン族、メラウ・キャンプではカレン族が暮らしている。接

してみた印象は、カレン族は内気、カレン族は人なつこいところだろうか。難民数は、前者が1万8000人強、後者が約1万7000人で、年間4~5%ずつ増えているという。これらのキャンプを含め、計4つの難民キャンプをUNHCRメーホンソン事務所がカバーし、難民の登録やモニタリングなどを行っている。

キャンプには、学校や職業訓練所、クリニックなどの施設、そして難民の家々がある。建物は全て竹を編んで造られ、屋根は葉葺きがほとんどである。外から簡単に覗くことができる学校では、どの教室でも、子どもが夢中になって勉強している姿が窺えた。

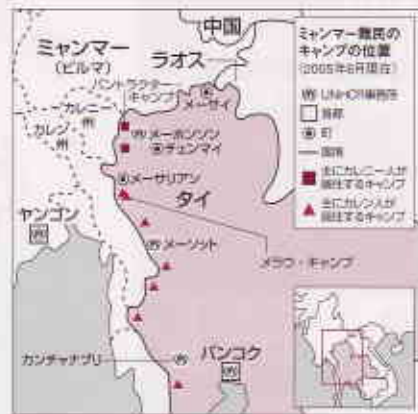
印象に残っているのが、メラウ・キャンプの図書館で、UNHCRのパートナーでもある日本のNGO、社団法人シャンティ国際ボランティア会(SVA)が運営している注。折紙で色とりどりに装飾された室内。児童書は、ミャンマー語、カレン語に翻訳されている。ちょうど学校の授業が終わった時分で、子どもたちが大挙して押し寄せ、本の取り合いが始まった。彼らは、本を読むという学びや娯楽に飢えている。この子どもたちの情操教育を日本のNGOが支えていることに誇らしさを覚えた。

子どもたちはどんなことを考えているのだろう。たとえば8歳のアシド君。両親を含めて8人家族、毎日この図書館に来るのが楽しみと言う。しかし「将来は何になりたいの?」と尋ねると、急に口ごもった。

「学校の先生やお医者さん?」と、通訳が気を利かせて彼の答えを促す。やっと彼は口を開いた。「人間になりたい」と。他の子どもも、「将来の夢」となると、しばらく考え込んで、「先生になりたい」「お医者さん」などと、通訳の促すままに答えるのだった。



メラウ・キャンプでSVAが運営する図書館  
UNHCR/S.Mezaawa



## 教育の重要性と今後の課題

大人にもインタビューしようと、数件の家庭を訪問した。家には靴を脱いで入るので、ミシミシいう竹の感触が足に心地よい。ある人はパソコンを布で覆い隠すように持ち、部屋が雑多な物で溢れている一方、またある家は何もなく殺風景であった。皆、前述した理由で祖国から逃れようと、徒歩で、泳いで、あるいはボートに乗って国境を越えてきた。いつかはミャンマーに帰りたい、自分は教師だったのでまた教師をしたい、自分は農民なので、帰ったらまた農業をしたい、そんな希望を持っているので、祖国に帰れなくともよい、と言う人々もいた。

ところで「今、一番何が必要か?」という質問には、誰もが例外なく「教育」と答えた。いや、難民だけではない。現地のUNHCRやNGOの職員、キャンプを管理するタイ内務省職員も、「教育」が優先課題だと言う。教育に関してはNGOの支援もあり、難民たちによって高等教育まで提供されている。しかし問題は、難民たちには「その先がない」ことなのだ。いくら優秀でも、大学に進学できず、キャンプ内での仕事は非常に限られている。だから子どもたちは将来の夢について語るのを躊躇していたのかもしれない。

一見、平穏そうに見えるキャンプだったが、難民であるが故、この難民たちに「自由はない」のだと改めて痛感させられた。子どもたちの将来は決して明るいとは言えない。そして、いつ彼らが祖国に帰還できるかもわからない。今後、私たちは教育も含めて、彼らに何ができるのか、真剣に考えていかねばならないと思った。

注:詳細については、本誌23号の「難民キャンプに図書館を」を参照のこと。